

---

# 小話集

佐川波瑠文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小説集

### 【ZPDF】

Z0601S

### 【作者名】

佐川波瑠文

### 【あらすじ】

短いお話をまとめました。ネタメモ帳もあります。物語に組み込んだり、それを元に話を作るかもしれません?すべてのお話は、恋愛に繋がります。ブログにからの転載した話もあります。

## 王と商人の娘（前書き）

獅子とかぐや姫の第31話より抜粋、編集しました。

## 王と商人の娘

あるところに民衆、お客様にとても人気のある商人がいました。子どもたちの中でも、娘のセシリアを特に可愛がっていました。セシリアは、跡取りにしたい程、気立ても良く、頭も良く、明るく美しい、まさに看板娘でした。

そして、1人の貴族と恋に落ちます。しかし貴族と商人の娘。2人は、密やかに逢瀬を重ねます。

そしてセシリアは貴族の子を身籠ります。身分のこともあります。貴族には隠していました。しかし貴族の家来達に気づかれ、貴族の屋敷に連れていかれます。

しかし連れていかれたところは、貴族の屋敷ではなく王宮がある場所。貴族は、何人の妃と子がいる王だったのです。

セシリアは、悲しみます。しかし王はセシリアに謝罪をし、約束します。セシリアを、守ると。王にとつてセシリアとの恋は、初めて知つた真実の愛でした。

しかし、王宮は危険な場所でした。寵妃争い、王位継承問題に巻き込まれるからです。

王の子を身籠るセシリアは、何度も命の危機にさらされますが、王に守られ無事出産します。

生まれたのは、美しくまばゆいばかりの金髪の王子でした。

セシリアはH&MとH&Mトトとが幸せな、一時を過りましたでした。

## 交換条件

次期当主となる、弟が誘拐された。人質になつた。

人質交換の条件は出されなかつた。交渉もさせてくれなかつた。

いや、一つだけあつた。姉である私を交渉役に向かわせると。

「一体何が目的なの？早く、私の弟を返して！」

母が死んで、我が家、屋敷全体が沈んでいた。そこに光をもたらしたのは  
、今の母。

新しい家族、生まれてた弟と一緒に過ごした光の日々を、失うわけにはいかない。

「いいだろう。それには、条件がある。」

暗い室内の中には、男の声しか聞こえない。

「何？」

弟を返してもらえたなら、私はなんでもする。

「人質と交換に、そなたを俺の花嫁にする。それが条件だ。」

「何を言つてゐるの？」

クツクツと男は、笑う。

「俺の目的は、初めから、そなただけ。そなたが欲しかつたんだ。」

## 彼は王国のブラックリスト入り！？

この王国には、ブラックリストがある。私は寸前の人物の調査をすることになった。

とある理由で、田本から異世界に転生トリップした私。

ひょんなことから伯母からあるお願い？バイトをお願いされた。

そのバイト指令は伯母の秘書の手紙によつてもたらされた。

内容はこうだ。

危険はないと思うけど、彼がゲイかどうか調べて欲しいの。

うふっ

と言つ言葉が聞こえてきそうだ。

伯母は60まじかと思えないくらい、茶目っ氣があると言つた、可愛らしいのだ。それに、王宮で官僚をしていてバリバリ仕事をこなすんだから、非常に魅力的な女性だ。んで、忙しい伯母を手伝うのが私のバイトだ。

今回の調査対象は、王都を警備している兵士。

映像が記憶されている魔法玉をみると、色気たっぷりの美形。前髪は後ろに流しているのが、また大人で色っぽい。目は黄金の色。髪は茶色で、軽くパーマをかけたような長めだ。

一体ここいつ、何をしたんだと思つた。

いや、何かしたに違いないに変わつた。

それに、危険すぎる任務だよーー伯母さん！

「あつあの。」

ここは、兵士の宿舎。男装して清掃バイトに潜り込んでそつそつだ。

「新入り？」

そつ早速迫られてます！

「そつそつです。」

ふつふえ。壁際に追い詰められて、頭の両横には、手をつかれちやつてます。

「ふーん。可愛いね。俺の好み美少年だ。」

「ひつー！」

逃げられない。この色気が逆に恐い！  
背の高い彼が段々屈みこみ、私に顔を近づける。

「優しくするよ？」

「ヤリと笑い、私の顎に手をかける。  
おつ女つてカミングアウトしたい！」

もちろん、秘密任務だしできない。

それに、カミングアウトしても、信じてもうかる自信もない。

髪は短く、サラシもまいてるし胸もない。日本でも、男の子に間違えられてたくらいだし。

「レイ、仕事はどうした？」

あー神の救い！彼の上官らしき人が来てくれた。これで、逃げられる。

「向つて、口説いてるとこりです。」

うわ。

「つややあーーー！」

ボカツ！

神の救いの手を彼はかる一く乗り越えました。

私は、彼に一発お見舞いし、逃走するのでした。

「あーあ。逃げられちやつた。名前聞いたければよかつたな。」

### 調査結果

彼はゲイに違いない。間違ないです。手が早い。襲われました。

いや、訂正。襲われかけました。

このキスの記憶は消去。やつの悪事を減刑せることになるのが悔しい。

家のためなら、愛していない人に嫁げる。

「君を幸せにするよ。」

相手はお金持ちの商家。人も良さそうだし、お見合いしたと思えばいい。

落ちぶれた貴族の私の家に出資する代わりに、私は結婚を申し込まれた。

そうよ。中には、年は何十も離れてて、見るからに、下品で鼻の下を伸ばした、愛人が何人もいる方に嫁ぐ人だつている。普通にいる。

私は、恵まれてる。この人と穏やかで温かな日々を過ごすの。

結婚式で、神々に誓いを立てる時だつた。

開くはずのない扉が開き、ぞろぞろと兵士が入ってきた。しかも、王直属の兵士、近衛兵だ。

「リルディール家並びに、ピノゼット家の者はいるか。王宮からの使者である。」

何事かと思った。私たち含め両家の関係者、招待客が膝まづき、使

者の言葉を待つ。

「王命である。この婚姻は無効とする。」

な、何を言つてゐるの？

「並びに、リルティール家の息女、ミヤビ様は、王命によつて皇太子様の妃として即ちあざることあになつた。」

言葉を失つとはまさしくのことだつた。

「わやつ何ー？離して下せーーー！」

「ミヤビ様、殿下から今すぐ後宮に連れてくるよう厳命されています。失礼致します。」

花嫁である私は、そのまま後宮へ連れ去られた。

「殿へ、ミヤビ様を後宮にお連れしました。」

「わかった。今行く。」

「ミヤビ…そなたを他の男の者にはせん。」

結婚前夜。あの晩餐の夜に再会しなければ、君への思いを閉じ込め  
たままだつたのに。

## 力強い君

「痛ツ」

投げ出された先は、宴の場。

「この者が、紛れこんでいました。」  
宴で、酒を酌み交わす男たちが一斉に私を見た。

「ほー。儂に、遣わされた女かもしれん。」

嘘。そんなわけない。

近づいて、くるな！工口親父！！！

「とりや ああ！」

「つあつ！？」

「貴様あ～！」

柔道の投げ技で、ぶつ飛ばした。

工口親父は、顔を真っ赤にしながら、刀を私に近づけた。

「何よつ！殺すなら、殺せば？」

恐い、けどこれで終わる。

「私にはもう、帰る家も家族もない。失うものなんてないんだから。」

見知らぬところにきて、私は一人なの。

泣いてはいけない。この口親父の刀への恐怖じゃないの。

死んでしまえば、家族の元に帰れるから嬉しいの。

でも目には、涙が。ダムが決壊するのは時間の問題。

「さあつー。」

「うー。」

「止める。切つても、死体処理に煩わされるだけ。宴も冷める。」

若い男。けれども力強い声。

「この娘は、私が貰う」

時代は、戦乱の世。

あの娘の力強さにこの宴にいる男たちは、釘付けだった。

戦に明け暮れる男が、怯むくらいの力強い瞳。

殺せと言つのに、なんという生の輝きを放つのであらう。

目には涙が溢れ、震える体。

私が娘を貰う。

こんなにも、胸を熱くさせた女は初めてだった。

## 彼は王国のブラッククリスト入り！ ？2

春休みは、変態ゲイのせいでひどいめにあった。

市倉 結真。イチクラ ユマ、16歳。

本来なら、日本で女子高生で新2年生のはずなのに。

とある理由で、異世界に自主トーリップをし、王立魔術学校に入学するはめになった。

自身の魔力を安定させるためでもあるが、伯母の指令で学校の調査もすることになったからだ。

今回はブラックリスト調査も含め、全体的にだ。

指令

学校で怪しい噂を収集し、報告。  
校内の講師の動きを調べること。  
特に男子寮内。危険はないわ。

うふつ。伯母の笑い声が聞こえるような。そんなバイトは、不吉な  
…そんなことはない。

いや、そんなことありました。

変態ゲイ調査が、上手くいったせいだ。

あの事件で男装姿の素晴らしさが評価されて、学校に男装して入学。潜入調査をすることになりました。

年齢は、13歳。

ユーマ・パドリック

男として入学。

男子寮で生活。

バイトだけど、伯母さんの頼みは訳あって断れません。

調査が終われば、寮を出れるしね！

そんなこんな異世界生活。

入学して、3日。時間割も決まり、女の子とぼれることがなく過ごしている時でした。

調査開始をしようと思つたとき、事件は起こりました。

「ユーマ君。ちょっとといいかな？」

授業後、ガリ勉風メガネ講師に声を掛けられた。

後ろに髪を、束ねてているけどボサボサ、前髪は目にかかるし、眼鏡なんか瓶ぞこのよう。

どんだけガリ勉しているんだか。

しかも、気持ち悪い、不気味なのだ。

授業中はこつちをじーっとニヤニヤ見てくるし、即怪しいやつ認定！

輝かしい 第一号だ。

いいチャンスだし、さつそく調査開始！

「はい。何でしょう？先生。」

ニヤリと笑い近づいてくる先生。

何か彼が纏つ雰囲気が変わった。

何かヤバい。てか、これって…もしや…嘘でしょ…？

「久しぶり。君に会つてから、不幸続きたつたよ。」

力チャリと眼鏡を取り、前髪をかきあげる。

色気を解放した、妖艶な笑みを浮かべる先生。

いや、あの時の変態ゲイ男〜！！

「ひいー！」

不幸続きつて、ブラツクリスト入りに入つたせい！？知らない、知らない！私、知らないからつ！むしろ、あんたのせいだし。

「待つて。待つて。逃がさないっての。」

ガバリと後ろから、抱きつかれた。

おあ  
不幸絶毛も君は会えたか? チヤ二六かな?」

アラビア語の基礎知識

おひたなひて。こひなとこしるひた。離せ。夢見

この変態 前の男が目を遣さず 髪色を金髪で遣さず 父親: 一  
イだけ? 名前も、アルフレッド・ギブソンとか言つ違ひ名前だし…

何者なんだ！？

変態？それに君がそいつぢでなんんじやなし

うわあ、さらなる変態発言。

「ちのやこにかんなつー・齧せつー。」

「まあまあ。俺がいるのはお仕事だよ。コーマーじゃ、こんなところにいたんだね。君のこと一生懸命探したんだけど、見つからなかつたんだよね。一体…」

ふつと笑つた彼の吐息が、耳をくすぐる。そして、わざと低めの声でささやかれる。

「一体、バックにどんな虫つけてんのさ？かなりの大物…？」

「うーうー。顔は見えないけど、私を疑つてる。

「うー虫はお前だろー変態！」

早く逃げなきや。ジタバタするけど、本当に力が強すぎてアイツの腕が外れない。

「ふふふ。上手いね まあ虫が俺だけつて嬉しそよ。そいつより、可愛がつてあげるよ ？」

「うわあ、虫なんて何にもいないからーそして、いらないつー何もいらないー！」

「おつと次の授業が始まる。時間切れだな。」

パツと手を離されて、暴れていた私は床に落ちた。

「いっただーいきなり離すなよつ。」

「残念、時間切れ。また、今度ゆっくり中話をうな、コーマ。」

チユツ。

一日散に教室から逃げた

大混乱で何も考えられない。

とりあえず色々まずい。

色々、色々…まずーーい！！！

とつあえず、呪われた唇を清めなきやー！

だつ誰かっ、聖水を下さい！

「クツ。面白い。ますます興味がわく。」

眼鏡をかけ、服装を整え、講師モードに切り替える。

「やつぱぱつ歯は柔らかいし、抱き心地もいい。ますます俺好み」



## 見守つてね？ 第1話

「わつ何！？」

いきなり先生に手を引かれて、校舎の奥にある教員専用の駐車場へ連れていかれる。

「今日は、サンセーと帰るんだ。」

先生は、じゅりを振り向くことなく、長い足ですんずん歩いていく。

「ちよつと離してくださいー！」

手首を掴む先生の手は力強く、振りほどくことはできない。

引きずられるように連れていかれ、先生の車の助手席に投げ込まれた。

「あやつー！」

いつの間にか、先生は運転席に乗り込んでいた。

そして、私に体を近づけながら言つてくれる。

「俺を嫌がるのは、わかるが我慢しろ。」

先生の眼鏡の奥の目が細められ、唇の口角をクイッと持ち上げる。

その表情に、自分の顔が真っ赤になるのがわかる。胸がドキドキする。

「うーーーあーーー！」

そして、先生はその整った顔を私の顔に近づけてくる。

嘘、嘘！？キッ、キスされる！

ダメ、逃げなきゃ。

でも、逃げる事のできない車内。

いや車内のせいにしたいだけで、先生にドキドキされた心は……。

もつ、逃げ出せない。

私は田をギュウッとつむるしかなかつた。

初等部と中等部は、少人数教育が行われ、決めの細かい指導に定評がある。高等部は、外部受験の枠を大きく広げ内部生の受験に対する競争力を高め、国内外の名だたる大学への進学実績をもつ。

さらには、確かなセキュリティ、快適な設備、都心にありながら静かで鈴森という小さいが豊かな自然が広がる学園なのだ。

今日はその高等部の新2年生と、新3年生のみの始業式。

静かなはず式は、ざわついていた。

新人の講師の紹介で、マイクに向かつた男の先生のせいだ。

「サトウ アッシです。未熟者ですが、よろしくお願ひします。」

イケメン、かっこいいなど辺りはそんなような言葉が飛び交った。

遠くだから、あまり見えないが確かにそうみたい。でも、私はまた別のことも思っていた。

おんなじ苗字だ。

よくある苗字だけど、苗字が同じ人を見つけるとなんとく気がいい。

時計の時刻が誕生日を指すのを見て、何となく嬉しいように。

「担当は、世界史と公民、主に現代社会と政経です。新2年生D組とF組の副担任となります。」

新2年生からは、主に歓声が。

前列の新3年生からは、落胆の声が聞こえた。

## ハムスターな彼女1

そのうち 告白

この部屋に引っ越してきて、半年。

片想いしてきて、半年。

お隣さんが、好き。

「すっ好きなんです。」

もう、限界だった。とうとう口にしてしまった。人生初めての告白。

一悶れだった。

背は175センチくらい。やや細身。

髪も田も少し茶色。眼鏡をいつもかけてるサラリーマン。

真面目な感じで落ち着いてて、ちょっとほわっとした癒し系。疲れでヨレヨレ時の顔なんて、ツボ。

友達に彼のことを話すと、枯れるとか草食系言われるナビ……そこ  
がいい！

肉食系もガツガツ系も男の子って感じが、嫌なんだもん……。苦手……。  
お隣さんに会うと必ず挨拶してくれる。私からする前にしてくれるのが、ただそれだけで嬉しい。

そしてその声は優しいもの。声だけじゃない。

少しずつ言葉を交わして知ったお隣さんは、やつぱり優しかった。  
最初は挨拶だけで、満足していた。でも言葉を交わしてから、どんどん欲張りになった。

そして、今思いが溢れたの。

「…。」

告白はちやんと皿を見て言えた。でもその後は恥ずかしくて俯いていたんだけど、告白してからお隣さんのじばらーく反応がない。

ゆづくりと顔を上げると、口元を押されて皿を見開いたお隣さんがいた。

かつ可愛い！私の告白にビックリしちゃったのかな？ビックリよ、やれだつたら申し訳ないんだけど、可愛すぎると。

でもね、こんなビックリしてる。

こんな見知らぬお隣の子に声出されても困るし、きっと振られるんだな。

なんだか悲しくなつてきちゃつた。涙が出来た。

「俺も…限界。」

「へ？」

「ぶつ！ハムスター似すぎだろっ！！ハハハ…ヤベー！」

今まで我慢してたらしい笑いを、一気に吹き出したお隣さん。目は涙目、顔は赤いし、肩は震えてる。

「はむすたーー？」

ハムスターって私？どこが？

笑い止まらないお隣さんの笑いはしづづくで続くのである。

## ハムスターな彼女 2

それに ハムスターなわけ

「はあ腹いてえ。」

今までめっちゃガン見されてたから、俺に気があるんだなあって長年の経験から思つてた。

まさか今日告白されるとは思わなかつた。不意打ちとは、このことだ。

「…。」

ぽかーんとしたままの彼女を見る。

ヤバい、ハムスターにしかみえない。その半開きの口にひまわりの種をやりたくなる。

「いいで俺の帰りずっと待つてくれたんだ。」

コクンと頷く。ハムスターのしぐれをつくりだ。

「じゃあどうあえず、俺んち入んなよ。ハムちゃん。」

「ううえ？ はあ。」

なーんにも疑問を持たず、付いてくるハムちゃん。

ハムちゃん。

それは、俺の隣に住む彼女につけたあだ名。

初めて彼女を見た時だ。

『あつハムスター』と心の中で思った。むしろ、ハムスター発見つて感じだ。

背は小さく華奢で、髪はふんわりパーーマのボブ。

目はくろくろ、丸顔童顔でほっぺがまんまるなふにふにのもち肌。

髪色と色白な感じも含めて、頬に餌を詰めたゴールデンハムスターにしか見えない。

さつきの告白ときだつて、ハムスター見たいに鼻をひくつかせてるし。もう黒目がちの目が潤んで、俺を見上げるハムちゃんに我慢が出来なかつた。

ハムスターが、餌ちょーだい？ つていつてるみたいにしか見えねーんだもん。

「痛い……」

気がつくと、砂漠にいた。

暑いってもんじゃない。

日射しが頭から突き刺さり、照り返しが足をジンジンと焼かせるから  
痛い。

色白の私の皮膚はあつといつ間に、真っ赤。

元々真夏の日本にいたから、Tシャツに短パンにサンダルのラフな  
スタイル。

砂漠を歩く格好でもない。

砂漠は歩くといひでもない。

しかし、どうにか日陰やオアシスを探して休まなければ体がもたない。

汗を拭いながら永遠に続く果てしない砂漠を歩くしかなかつた。

それから、どれくらい歩いたかわからない。

皮膚が焼けて、水ぶくれ。サンダルの底も熱で溶けてるし、暑い砂が足裏を焼いて皮膚が剥けている。

もう限界だった。私はその場に倒れた。

もひ、汗も出ない。頭がガンガン痛くて割れそうだ。体のあちこちがヒリヒリする。

このまま、死ぬのだろうか。

きっとカラカラなミイラになるな。

天国で水を貰おう。

そして、私の意識は砂地獄へと沈んだ。

「じつかりいたせ。田を開けるのだ！」

男の人の声が聞こえる…。

「んつ。」

「つすら田を開けると、黒髪で褐色の肌の男がいた。

雰囲気のある人。それになんて、力強い瞳なんだろう。黄金の砂漠のよひな色の瞳。

「わうだ。口を開けよ。」

男の言つがままに、口を開ける。

「ふつ。んつ。」

男から口移しで、水を飲まされた。でも、拒絶する」とは出来なかつた。

身も心も

欲しくて

欲しくてたまらなかつた水分。

「うつもつと…もつと水をちゅうつだ、い

彼の唇が離され、物足りなさでいっぱいになる。掠れた声で、水を  
求めた。

彼は革袋からグッと水を飲む。

「やつ…。み、ず…。」

水が欲しいの私になんて残酷なことをするの？

「欲しければ、我が名を呼べ。我を求めよ。」

力強く、威厳のある声がぼおとする頭を支配する。

「なま、え？」

「アルバーンだ。」

「アルバーン、が、ほしついんん」

全てを言い終わる前に、冷たい唇で塞がれた。冷たい水がどんどん体に染み込んでゆく。

私はアルバーンの名を呼び、水を求め続けた。

「うつー！」

何かが、足に染みていて痛い。

うつすら田を開けると、辺りは薄暗い。たぶん夜だ。

そして、徐々に輪郭が明らかになつていく。

さつきの男、アルバーンがいた。

「少し我慢いたせ。」

「やつ何！？ 痛い！ 痛い痛い！ 離してっ！」

私の体は、薄い布で体を巻かれているだけ。そしてアルバーンも上半身は何も身に付けていない。

それよりも、痛い。

男らしく逞しい彼の体と手に抱かれたまま、体がズブズブと水の中に沈んでいく。

水が体のあちこちに染み込んで痛い！

「癒しの泉に浸からねば、火傷が治らぬぞ。」

「うつーく…やだ、離してっ！」

癒しの泉？痛くて耐えられない。こんなに痛いのなら、治らなくてもいい。

離せとどんなに暴れても、彼は離してくれない。生理的な涙がボタボタとこぼれ落ちる。

「痛いなら、我が体に爪をたてればいい。我的体に噛みついて、痛みに耐えればいい。」

挑戦的な目。夜空に浮かぶ星々よりも、煌めく黄金の瞳。

人の痛みをこの人は、わかっているのか。

彼に抗えない、自分が嫌。彼にも同じ痛みを与えていたと思つてしまつた。

男を睨み付け、彼の体に思い切り爪を立てた。歯をくい縛り、痛みにも耐える。

「いい顔だ。」

ふつと笑い余裕の表情を見せる。私の爪なんか、痛くもなんともないという風に。

悔しい。

「あつー・やだつ何ー?」

痛みは消えて、今度はぞわぞわと肌をくすぐる感覚が私を襲う。

「やだつ。恐いー!」

「素するな。傷は治つてきている。」

痛みで出た汗なのか、泉の水なのか。

彼がおでこに張り付いた前髪を払いのけ、髪を優しく撫でる。

そして、泉へと手を伸ばし水を掬う。

「うーはあつ、んーせだあ、助けてー!」

体が疼いて堪らない。

「これを飲めば、治りは早くなる。」

彼は泉の水を呑むと、そのまま私に口付けた。

「ー。」

水がなくなつても、彼はキスを止めない。それどころか、キスを深めて舌を絡めとる。

熱くて、疼いて堪らない。

ガクガクと震えの止まらない体。

私は、夜空の下で氣を失つた。

最後に見たのは、煌めく2つの黄金の熱い瞳だった。

砂漠に落ちし異界の乙女、水を湛えし者。

すなわち、民に恵みを与えと、繁栄へと導かん。

この泉の乙女得し者、砂漠の王者とならん。

「何を言つてゐるの? アルバーン。」

「余は、この國の王である。泉の乙女であるあなたを妃としてこの後宮に迎えた。」

訳がわからない。ここは後宮で、私が妃?

「いづれは、王妃にする。アリサ…。」

私の腰を掴み、そして顎に手を掛けるアルバーン。

「いやつ離してよー何を言つてゐるの? 何勝手なことしてゐの! ?」

抵抗するが、砂漠で火傷をし体力を消耗した体では何もできない。そしてアルバーン、筋肉があり厚みのある雄々しい肉体の持ち主。敵うはずもない。

「我が妃として、不自由はさせぬ。」

「私の気持ちはどうなるのよー?..」

「先程、申したはずだ。二ホンへ帰る術はないと。ならば、余の側にいるのが一番よからひ。」

「ふざけないで!! 人を物みたいに扱わないで!!..」

「愛してる。アリサ。」

「えつ?」

初めて人に言われた。

アルバーンの鋭い目が、私を離さない。

低くて深みのある彼の声が、身体中に響いてどうにかなりそう。

「あなた、自分が今何を言つたかわかつてゐの?..」

私の方がよくわかつてない。これを言つのが精一杯だつた。

「愛してると言つた。」

「私が泉の乙女だから? あいにく私はあなたみたいに魔法なんて使

えないし、勘違いよ。それに繁栄を私が導けるわけない。」

冷静になるのよ、亞理紗。落ち着いて?と何度も何度も心のなかで思いながら答える。

「乙女でなくともかまわぬ。皆がそう申してるだけだ。それに余が、この国を繁栄させればよいだけだ。問題ない。」

「…?」

「乙女がひぐへぬのよ、その自信は…。」

こんな風に言いたいが、彼は本当にそうしそうだ。

堂々として威厳のある王者の纏つオーラと、きつぱりと迷いなく言い切られたからだ。

「そなたがいれば、なんでもできる。余はなんでもしよう。」

私を見つめる目が、熱を持つ。

その目に、心が焼き付くそれそつだ。

嫌だ。これ以上私に踏み込んでこないで。

「初めて見たとき、アリサを欲しいと思った。今も欲しくて堪らぬのだ。」

王として君臨する彼の、誰もがひれ伏すような圧倒的なオーラに、  
屈してしまいそうになる。

「んっ！」

そうしてゐうちに、アルバーンに唇を無理矢理奪わた。

痺れるようなキス。

私の口腔を好き勝手荒らしていくのに、心地よい。

でも、このままじゃいけない。

こんなのは嫌っ！嫌なの！！

パーンッ！

室内に乾いた音が響いた。

私がアルバーンの頬を叩く音。

一瞬茫然とした彼の隙をつき、その腕から逃れて距離を取る。

「…。」

アルバーンが、鋭い目で私を睨み付けていた。

無言の怒りが圧力となり、私を襲う。でもそんなはの気にならない。

悪いのは、彼。

最低なのは、アルバーンなのだから。

私も対抗するように、睨み付けていた。

「嫌い。」

「なんだと？」

怒りで震える声が室内をさらり、重い空氣にする。

「聞こえなかつた？ だつたら何度も言つわ。嫌いよ」

「余を拒むのか。」

当たり前だ。私の気持ちを考えず、欲しいからって私をこんなところに閉じ込めた。

そんなの愛なんて言わない。

私はこの世界に来てしまったけど、少なくともあなたのものなるために来たんじゃないわ。

あなたのものになんか絶対ならない。

私は、アルバーンにそう叫びた。

「ククク。面白い」

「何を笑ってるの？」

私を嘲笑ってるの？馬鹿にしてるの？

「ますます欲しくなった。余にそこまで言つ女は初めてだ。」

「こんなことをされたら、誰だって反抗するわ。それに、私はますますあなたを嫌いになつたわ。」

本気で言つてるの？、面白いことがぶれかけてる。彼の頭はビリになつてるので。

「ふつ。何度も言つがよい。余はそのたびに愛してると言つ。そな

たよりも、強い気持ちを込めてな。」

不敵笑みを浮かべながら、にじりよるアルバーン。

「ここにないで……」

私と彼の距離はどんどん縮まる。

じりじりと追い詰められて、壁にぶつかった。

ドンッとアルバーンは、私の両腕を壁に縫いとめて私を閉じ込める。私は完全に捕まつた。

負けたとわかつてはいるのに、弱い犬が吠えるように下から背の高いアルバーンを睨み付けていた。

無抵抗のままなんて、私のプライドが許さなかつたから。

「気の強い女だな。だが、わかつてないようだな。」

「何が？」

「アリサの先程からの態度だ。それは男を挑発して煽り、独占欲をくすぐるだけだ。」

アルバーンの瞳が、獣のよつよつと光る。そして、私を睨らう。

「嫌！やめつ！んんん。」

さつきよりも激しいキスに翻弄される。くちゅりとわざわざ音をなら

し、互いの唾液を行き渡らせる。舌にもねつとりと絡み付かれたり、吸われたり。

恋愛」とからはじまらへ遠ざかり、仕事の鉄の女と化し、おまけに処女の私にはかりハードだった。

だから苦しくて、息を荒くなる。

そしてわざわざつまびらきとじびれて、体がじんじんする。

熱くなつて溶けそうになる。

「ふつはあつ。」

やつと苦しさから解放されて、病み上がりの体は思わず彼に寄りかかってしまう。

「馴れぬようだな。男を知らぬな。」

バレてる。最悪だ。ていうか恥ずかしい。

「つかれり… わやつ…」

つむこと、言おつとして彼に軽々と抱き上げられた。この年になつてお姫様抱っこだ。

「弱つてゐる体に無理をさせたな。休め。」

病人に無理矢理キスしといて、優しくしないで。

未だキスの余韻も收まらず、熱も冷めやらぬまま私は彼の手により天蓋付の豪奢なベットへ寝かせられる。

そつと、優しく。

「早く元気になれ。」

そう言って私のおでこに口づけると、部屋を出ていった。

やつぱり彼なんて嫌い、嫌い、大嫌い。何もかも気にくわない。

私はムカムカとしながら、毛布に潜り込んで眠りについた。

「彼氏ができた！？」

いきなり、そんなこと言われたらビックリする。

そんな気配もなかつたし、話も聞いてない。

「紗代ちゃん、声が大きい。」

しまった。ビックリしすぎて、学校の食堂つてこと忘れてた。でも、こここのテーブルには、人が少なくて助かつた。

「ごめん。それでどんな人なの！？」

「早川さんって言つて、年上。うん、かつこいいかな。」

照れながらはにかむ由香子は、すうぐ可愛い。

「自分でかつこいいとか言つて、どれくらい上なの？」

少し茶化しながら言つと、さらに顔を赤くさせて本当にもんと小さな声で反論する。

いーな、彼氏さん。

天使みたいな由香子…とは言い過ぎかも知れないけど、こんな可愛いくて良い子を彼女にできるなんて幸せものだ。

「12」上かな。未だ28歳だけビ。」

「は?」

衝撃を受けてしまった。

早川さんつてさん付けした辺りから、大学生だと勝手に予想付けていたからだ。

由香子…それは年上すぎでしょっ!今年、29歳?来年30歳の人が、女子高生と付き合うとか犯罪でしょ?

「かなり年上だけど、騙されてないよね?」

「えつ?」

今度は、由香子がポカンとしてしまった。

だつ、だつてや、由香子を見たら誰だつてそつ<sup>音</sup>に違いない!

ものす<sup>音</sup>く可愛<sup>音</sup>くて、甘<sup>音</sup>たつぱりの顔立ち。

しかも、少し天然でのほほんとしててる彼女。

「絶対、ロリコンな奴に騙されてたぶらかされたに決まってる!」

「大丈夫だよ?紗代ちゃん。騙されなんかいないよ。」

不思議な顔をしながら、あつさりとした感じで話す由香子。

やつぱり全然わかつてない。騙されてる」と云つてないんだ。

「だつてね、紗代ちゃん。早川さんは、お兄ちゃんの親友だから。

「えつー…ええ？」

そつだつたの？

由香子の話をまとめると、早川さんはお兄さんの親友で会社の同僚。

しかも由香子が小さな頃から、憧れの存在。初恋。

長い間片想いをしていた由香子の思いが、今回実ったというわけだ。

「いのん。彼氏さんを、色々ひどく罵りつけやつて。」

普通は、彼氏のことをこんな風に罵われたら怒るはず。

「いのん。心配してくれてありがと。」

けれど、由香子は笑いながら許してくれる。しかも、ありがと。なんて。いのんちがありがとつだよ。

「ふふふ。でもねお兄ちゃんが、早川さんに紗代ちゃんと回りついていた

クスクスと何かを思い出してくる。由香子。

同じことって何だろ？

「付き合っているって言つたひ『おまえ、ロココン~』って」

「やつぱりねえ。普通そつだもん。」

よかつた。おんなじ人がいて。それなら、いつも色々話しやすい。

「ひどいっ。でも2人とも大人だから、紗代ちゃんみたいにむきになつてはいなかつたよ。」

「もう~それを言わないでよ」

「それにしても、由香子に彼氏かあ」

あれから早川さんとのあれこれを聞いてから、ふと思つた。

何だか不思議。

色々聞いても、彼氏がいる由香子って想像できない。

可愛いのにいつも男子を振つて、泣かせてばかりで、自分の恋愛には興味なさそうだったからね。

今考えるとそれは、一途に早川さんが好きだったからなんだけどさ

あ。

それを引いても、社会人の超大人男子と付き合つてゐる姿は想像できない。

でもね、これは普通に思うよ。

「いいなあ。」

「…つて。由香子は、幸せそうだもん。

「紗代ちゃんにもすぐできるよ。」

「ん~。それよりも由香子の恋バナが楽しみだな」

元々、恋バナを聞くのは好き。女子高生つてみんなそんな気がするけど。

「私ばつかり色々話すの? 私も紗代ちゃんの恋バナ聞きたいのにい!」

「ん~でもね」

中二で失恋して以来恋してないし、彼氏もいたことないから恋バナなんてできるわけない。

彼氏だって、好きな人さえもしぶりはできないと思つ。

好きな人は、いつも欲しいなあって思つよ？

でもね人の恋バナ聞いて満足しちゃつてるから、できない氣がするんだよね。

泣き合ひしる由香子のことを想像できないとか思つたけど、それ以前に私自身恋愛ししる姿こそが一番想像できないかも。

Jの時、Jこんな私に恋が忍び寄つて来てるとは思ひもしなかつた。

## 三人称の練習

久川育実に異変が起きたのは、高校合格が決まり少しばかり長い春休みを過ごしていた時だった。

最初は、急に強い目眩が彼女を襲つた。次に頭が割れるような痛みを感じ、休もうと自身のベットに倒れ込むように横になつた。

この数分で、頭痛は熱に変わり、彼女は汗だくだった。

それもぐつしょりと。

服は肌に張り付き、セミロングのナチュラルなブラウンの毛が首に纏わり付くぐらいに。また、それらがさらに彼女を不快にさせていた。

これだけでは、ただの風邪と思うだろう。しかし、育実の症状はなんの予兆もなく訪れていた。それに普通の風邪とは違うと、彼女自身が一番感じていた。

とにかく体が動かない。薬を探すことさえ、できないくらいに。今感じている熱は体の内に籠つて燐り、何か足りないとしきりに訴え、体の中でもうねるような感覚を彼女に与えていた。

育実は小さい頃から、風邪一つ、病気一つしなかつたとは言えない。が、それは人並みに病気に掛かる程度であり、だからこそ今の発熱が普通ではないと感じていた。

しかし、彼女を助けてくれる者は側にいない。

春休みとはいって、今日は平日。

母は仕事に出掛けている。他に兄弟もいなければ、全国各地を飛び回る単身赴任中の父は滅多に自宅にいない。

「のままでもいい」と思い、誰かしらに助けを求める為にすぐ側の勉強机にある携帯を取りたいが、那些細な行動ができないくらい体が石のように動かない。口は、はあはあと荒い息を繰り返すのみに集中し、声も出ない。育実の体は、肺に酸素を取り込むのに必死なのだ。

こんな状態では、呼吸がいつか止まってしまうのではないかと育実は思った。

母が帰宅するまでの数時間、体が持つのだろうか。

「のまま、死んじゃうのかな」

育実は心の中で呟くと、プリリと意識を失った。

マンションのエレベーターで自宅階に降り、カツカツと高めのヒールが美しい黒いナメルのパンプスで颯爽と歩き始めるのは育実の母、美月。

育実の、父親譲りの天然のブラウンで緩く内に巻く髪とは違い、美

月は濃い田のブラウンに髪を染め、まっすぐとした長い髪の毛をきつちりとクリップで纏め上げていた。

質の良いベージュのトレーンコートを羽織り、手には持ち帰りの資料を入れた、丈夫で使い込んで味が出た深い赤のブランドバック。それら二つは、仕事を頑張った自分のご褒美に買った、美月の勲章であり長年の相棒である。

まさにキャリアウーマンと言いたいところだが、年のわりに童顔で大変可愛らしい顔立ちをした彼女にその言葉は見た目を表す上では似合わなかつた。

しかしながら大変しつかりもので仕事もできるキャリアウーマンには間違いないし、彼女は気づいていないがその可愛らしさは親しみやすさに繋がり、仕事でクライアントと信頼関係を結ぶ上で非常に良い効果をもたらしていた。

時刻は、19時を過ぎた頃だろうか。『飯時では、あるが美月の手にはそれを作るための食材などを入れた袋はない。

それは、日頃家事を手伝ってくれる娘の育実が長期休みの際は家事全般を引き受けてくれるからだ。

自分で言つのもなんだが、できた娘だと美月は思つていた。明るく、素直で、美月を含めて人を思いやれる優しい、かけがえのない一人娘だと。と、同時に特に性格、その他もうろにかな一り難がある夫に似なくて、本当に良かつたと度々思つていて。彼に似たら、きっと恐ろしいことになるに違いない。いや、そもそも娘と夫の性格

を比べるのは間違いないのかも知れない。

なんでそんな夫と美月が結婚したかはさておき、例え夫の性格に似てる子、どんな子でも、何者にも変えられぬかけがえのない我が子に違いないのだけれどとも思つてゐる。

難あり夫だとか、美月は夫に對して散々なことを言つてゐるが、彼女が言う子には彼との子であることが前提である。そこには確かに彼への愛が織り込んであるので、彼女が彼を愛していふことは間違いないのだ。また夫も、美月のそれを上回るくらい彼女を愛していた。

「ただいまー」

ガチャリと自宅のドアを開け、はつらつとした声で帰宅を知らせた美月はすぐに異変を感じていた。

美月がドアを開けると、育実が春休みになつてからだが、いつもの晩御飯の良い香りと娘の「おかえりなさい」と彼女を温かくほつとさせれるような声がしないのだ。

「育実？」

靴を脱ぎながら玄関に上がり、娘の名を呼んでみるが返事がない。

どこかに出掛けたのかと思うが、電気は付けっぱなし。それに出掛けの際は、メールで連絡が来ることになつてゐる。美月は素早くコートのポケットにあるスマートフォンを取り出して操作するが、

育実からの電話やメールの着信はない。

では、寝ているのだろうか。とにかく嫌な予感がするのはなぜだろう。それは母としての勘なのか、美月は玄関からリビングを抜けて他の部屋を確認することもなく真っ先に娘の部屋へと向かった。

リビングを抜けた廊下の先にある娘の部屋のドアは、うすすらと開いていた。

いつもは閉まつていいのドアが、ひどく不自然に。

この時美月は、直感だが嫌な予感が確実なものに変わったのを感じた。

「育実！」

それを見た瞬間美月は、育実の部屋へ慌てて飛び込んだ。

彼女が見たものは、髪や服がぐつしょりと濡れた生氣を失ったように青ざめた娘がベットに横たわる姿だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0601s/>

---

小説集

2011年9月26日13時50分発行